

池田 維

元オランダ大使



いけだ ただし
1939年生まれ。東京大学卒業。
62年外務省入省。80年中国課長。
89年タイ国駐在公使、92年ア
ジア局長。94年官房長。96年
オランダ大使。2002年ブラジル
大使。04年退官。05年財団法人
日本交流協会台北事務所代表。

外務省での経歴について

和田 二〇〇〇年にオランダを訪れたときにお目に掛かってオランダの事業のことについて詳しく伺い、感銘を受けた池田大使に、ここでまた基金のオーラルヒストリーのプロジェクトの一環でお話を伺えることはとてもありがたいことだと思います。(一経歴からお話いただき

八年一月ですから、ほとんど同じような年です。
和田 まったく同じ年代ですね。

和田 恐縮ですが、何年のご卒業でしょうか。

池田 一九六二年に卒業し、その年入省しました。いわゆるチャイナスクールです。当時は中国語を研修する人間はごく少なく、「語学研修として中国語を希望した」と言うのと、「君は変わっているね」と言われたものです。私は

まず台湾にあった在中華民國日本大使館付の外交官補として二年間の研修期間を過ごし、その後、アメリカ一年の計三年の研修を受けました。六〇年代中頃には香港の総領事館に勤務しました。そして七二年の日中国交正常化直前に当時北京にあった日中覚書貿易事務所に外務省から出向しました。LT事務所、後に覚書貿易事務所と呼ばれる日中間の貿易事務所が北京に設立されたのは六〇年代に入ってからのことです。この機構は、建前は民間ですが、実際には政府の補助金が相当出ていましたから、半官半民のような機構でした。私が北京に赴任してしばらくしてから、田中首相一行の訪中があり、一九七

二年九月に日中間で国交が正常化しました。
国交正常化後、最初の北京における日本大使館の一員として外務省に復帰しました。大使館は当時八人で始まったのですが、そのときの開館の業務や、極めて初期の日中間の外交業務に関わることになりました。振り返ってみれば日中間の非常に大きな変わり目のときに、北京で勤務が出来たということ、大いに勉強になりました。

ただ、歴史の巡り合わせの面白さと言うか、皮肉と言うか、中国との国交正常化のまさに裏側の事態として、日本と台湾との外交関係が断絶したわけです。いま私がここに来て日本交流協会台北事務所の代表をやっていますけれども、この事務所は、当時の北京にあった貿易事

いと思います。

池田 オランダでこの問題について先生とお話する機会があつて、ここ台北でまたお目にかかってお話できることは、私にとりましても本当に懐かしく嬉しいことです。ここに日本交流協会台北事務所のホームページに掲載している私の略歴をお持ちしましたので、ご覧いただけますか。

和田 お生まれになったのは一九三九年三月。偶

然、頼浩敏先生も三九年のお生まれで、私が三

務所に近いものです。台湾との間には外交関係がありませんからあくまでも民間の事務所という形をとっていますが、規模から言いますと、当時の北京にあったものは比較にならない位大きなものです。実際、領事事務とか経済、文化、人的交流等の職務を含めて、事実上は大使館としての業務を行っているというのが実態です。今回、当地に赴任したのは二〇〇五年五月です。

私がアジア局中国課長の職務を担当したのは八〇年から八二年の間のことです。それは、鄧小平政権になって日本が中国に円借款を供与し始めた極く初期の時期に当たります。その後在アメリカ大使館付の参事官として、実際にはハーバード大学国際問題研究所の研究員という形で一年間アメリカに滞在しました。

その後の二、三のポストは割愛し、八九年から三年間、私はタイにある日本大使館の公使として勤務しましたが、同時にカンボジアの臨時代理大使を兼任しました。当時カンボジア和平の交渉過程に非常に深く関わる機会がありました。そのときのことを『外交フォーラム』に連載し、「あとで本にしる」と言われて出したものがあります。それが『カンボジア和平への道』です。いま手元に日本語のものはありませんが、英訳本がここにあります。

和田 『The Road to Peace in Cambodia: Japan's Role and Involvement』ですね。それが出たのは九八年です

ね。

池田 そうです。タイ・カンボジア勤務から帰って来てアジア局長を命じられまして、九二年から二年間弱勤務しました。

和田 細川政権時代ですね。

池田 宮沢政権と細川政権の時です。その後、羽田政権、村山政権が出来ました。いずれにせよ非常に短い期間に多くの政権が出来て、しかも自民党のこれまでの長い執政が終わり、急激に政治が替わった時期です。アジア局長のあと官房長を二年間勤め、その後、大使として転出しました。オランダ駐劄大使とブラジル駐劄大使です。それが終わって二〇〇四年六月に外務省を退官しました。四二年間の外務省勤務のうち、本省での仕事を除けば、中国、タイ、アメリカ、カナダ、フランス、オランダ、ブラジルに在勤しました。

アジア局長時代

和田 アジア局長の時代にお考えになったこと、なさったことについてうかがいます。

池田 アジアの問題というのは広範囲にあって、その中でも特に思い出の強いものを二つだけ挙げることにします。一つは、カンボジア和平への貢献として日本が戦後最初のPKO（国連平和維持活動）への協力のために自衛隊を

派遣したのが、私のアジア局長の時代に当たります。それまでは日本の自衛隊は海外に出て行ったことはなかったのです。国内はもとより、一部海外からも根強い反対論がありました。カンボジアに出て行った日本人たちは、カンボジアの平和と復興のために全力を發揮しました。その結果は単に指導者を含むカンボジア人のみならず、諸外国からも高く評価されることとなりました。国際平和のために貢献する自衛隊の活動は「軍国主義復活」などとは無縁のもので、カンボジアと平和の過程への日本の参画は、第二次大戦後、日本が地域紛争の解決のため本格的に関与した初めてのケースとなりました。ただ、二人の日本人（一人は文民警察官、もう一人は国連職員）が不幸にして犠牲になったということは悲しく辛いことでした。

もう一つ、アジア局長のときを今から振り返ってみて、大きな仕事だったと思うのは、天皇陛下の中国ご訪問の件です。

和田 何年でしたか。

池田 一九九二年一〇月でした。私はその年の夏、アジア局長に発令になった時には、天皇皇后両陛下のご訪問についての大きな輪郭は固まってはいましたけれども、まだ最終的な決定にまでは至っていませんでした。むしろ日本の世論が二分されているような状況でした。その年

の一〇月に両陛下が中国をご訪問されて、つつがなくすべての行事を終えられたのは、日中関係にとっては一つの大きな、時期を画するようなイベントだったと思っております。

今日においても、日本と中国の関係はまだ歴史の問題を巡ってぎくしゃくしています。九二年一〇月に天皇陛下が訪問されるにあたり、両国間に共通した基本的な認識は、天皇ご訪中によって、日中間に続いてきた先の大戦以来のマイナスの後遺症に象徴的な意味で大きな決着を付けるということでした。そういうことから言いますと、今のようには、まだ過去の問題を巡って両国間が緊張しているということは、残念なことではあります。中国の内部では江沢民政権下、九五年頃から「抗日記念館」を全国各地に多数建設したことが示すように、政治が大きく「愛国・抗日」という方向へ動き、過去の問題を蒸し返すようになってきました。このような形でナショナリズムを喚起するということは、自らの政権の維持のため、ひいては共産党による一党独裁支配を正当化するために必要な措置だったのではないかと考えられます。

和田 その後に細川内閣になりました。細川首相が侵略戦争であると、植民地支配もしたと、過去を反省するような表明を初めてされ、それから村山内閣につながっていくわけですね。戦後五〇年の国会決議もあるし、村山談

話も出るという新しい展開がありました。そのあたりはどんなふうにおかわりになったのでしょうか。

池田 細川首相のときに慶州で日韓首脳会談が行われまして、私もアジア局長として随行しました。韓国側は金泳三大統領の時です。確かに細川首相になって、それまで以上に踏み込んで、日本として過去の問題に対し深いお詫びの言葉、反省の言葉を述べることがありました。「創氏改名」ということに言及したのは細川首相になってからのことです。

村山内閣時代

池田 その後一九九四年に成立した村山内閣は、過去の問題について日本としての最大限の誠意を示すという形の談話を発表しました（一九九五年八月）。それは終戦五〇周年に当たり、閣議決定を経た上で出されたものでした。

この談話については今の時点から見ると相反する批判があります。まず一方では行き過ぎた謝罪ではなかったかという批判です。しかし当時としては、戦後五〇年が経った段階で、日本としては第二次世界大戦以来引き続いてきた戦争の後遺症に対して正面から向き合っている誠意を示す必要がある、ということだったと思うのです。それで「平和友好交流計画」も当時つくられたのです。そういう意味では、「村山談話」については、私は外務省では

官房長というポストにおりましたので、どういうことを伝えていくかという全体像については承知する立場にありました。

他方では逆に、日本は過去の問題について十分な謝罪をしていない、特にドイツに比べ謝り方が足りないという根強い批判があります。しかし、私はこの説は取りません。歴代首相を含め、日本は過去の無謀な軍事行動が周辺諸国等にもたらした多大な災難について、いろいろな機会に十分に謝罪し、また国によっては、相当額の経済援助を行ってきました。いつまでも謝り続けるということとは健全な国家関係を築く妨げになるものです。また、謝罪を要求しつづける側には特定の政治外交目的を有することがしばしばあります。さらにナチス・ドイツは一民族を組織的に抹殺するため、ガス室において数百万という人々を殺害したのであり、日本とドイツを同一の次元で論ずることは間違いだと思います。アウシュビッツ収容所跡を訪問して、そのことを痛感しました。また、ドイツは分裂国家であったため、戦後補償は日本と違って、個人補償の形を取らざるを得ませんでした。

和田 その時期、九五年七月にアジア女性基金がつくられるわけですが、この準備の過程でどのようにかわられたのでしょうか。

池田 アジア女性基金設立の際の具体的な事業について

こで見たオランダと日本の関係はいかがでしたか。

池田 私はオランダに五年間在勤することとなりましたが、今から振り返って見て、その時期は私個人にとっても、また、日蘭関係にとっても、豊かな内容をもつ時期でした。なかでも、村山内閣の時に決められた「平和交流計画」を自分が大使になって外にいつて、直接具体的に実施する立場になるとは思ってもいませんでした。しかし実際には村山内閣の時にこの計画が予算化されたことによつて、オランダとの過去の問題を処理するという事業を展開する際に、大いに役に立ちました。

というのは、日本とオランダの関係を振り返ってみますと、当時最大のテーマは表面にはあまり出ていないけれども、一皮剥くと出てくる戦争時代の反日感情、それがオランダの一部の人たちの間に根強く存在しているということでした。ですからこの問題を日本としてどのよう処理するのかということが、私が大使としてオランダにいたときが一番難しい問題でした。それ以外の点では日本とオランダは経済面等ではいい結び付きを持っていますし、お互いにごんごん協力関係は進んでいました。

例えば、第二次大戦の後遺症としては一九七一年昭和天皇のご訪欧の途次、オランダを非公式にご訪問された際には、日本の国旗が焼かれるなど、激しいデモがありました。またその後日本の首相の訪蘭の際、戦争被害者

は、私がかかわっていませんでした。ただ、アジア女性基金のもとでの考え方というのは、宮沢内閣の末期に韓国との間でいわゆる慰安婦問題が急浮上して、しかもそれが大きな政治・外交問題になったということがありました。それ以後もこの問題についてどのように対処するかということで、いろいろ日韓間で努力が払われました。

和田 あのとときの河野官房長官の談話にはかわられましたか。

池田 河野官房長官の談話内容の作成についてはかわかっていません。ただし、私はアジア局長でしたから、その概要については承知する立場にありました。戦後、日本は一貫してサンフランシスコ平和条約、あるいはその他の条約によつて、戦後処理の問題については法的にはすでに一〇〇%解決しているという立場を取ってきました。しかし女性の尊厳を傷つけたというこのいわゆる慰安婦問題については終戦直後には十分わかっていなかったということもあって、これだけは特別の扱いをして、日本側で誠意を持って処理しなければいけないというのが、このアジア女性基金のもとになった考え方であったと理解しています。

オランダ大使として

和田 一九九六年にオランダ大使として赴任なさつて、そ

の記念碑を参拝し、献花した花輪が、近くの池に投げ棄てられるなどのことがありました。

日蘭の交流は一六〇〇年に「リーフデ号」が大分に漂着したときから始まり、日本はその後二〇〇年余にわたるオランダから多くの影響を受けてきました。また、オランダも江戸時代の鎖国の中で、中国を除き、日本への渡航と交易を許された唯一の外国として日本事情を知る立場にあり、これはオランダにとつても重要な意味を持ちました。日蘭の交流は第二次世界大戦の一時期を除き、極めて友好的であったわけです。

和田 交流計画を活用されて、どのような活動をなさつたのですか。

池田 いくつかの面がありましたが、交流計画の一つの重要な側面は、予算が確保されたことによつて戦争被害者の代表達を日本に招待し、日本を見てもらうことが出来るようになったことです。私は着任早々、戦争被害者団体JES（対日道義的債務基金）の代表ラブレー氏と会いました。彼はインドネシアでオランダ軍の軍人として働き、のち将校クラスのポストにつきました。オランダ人とインドネシア人の混血です。見たところはアジア人のような風貌をした小柄な人でした。しかしいかにも軍人らしく、かなりの年でしたけれども非常に姿勢のいい人で、同時に親しみを感じさせる人物でした。さて、この

ラプレー氏との話し合いの結果、JESのメンバーたちが、日本政府の招待に応じるという格好で一九九七年から日本への訪問が始まりました。それからこのプロジェクトは一〇年近く続きました。

とは言っても、この平和交流計画による招待事業はそう簡単に決まった訳ではありません。その時の経緯は次のようなものです。「訪日招待につき、日本政府は予算を講じたので、あなた方が同意するのだったら日本への旅行に招待したい」とラプレー氏に私から話した時に、ラプレー氏は初め、「しばらく考えさせてくれ」、と言っていました。そして内部でいろいろ議論したところ、強い反対論があったらしいのです。ただ彼としては、反対だけして受けないよりも、むしろ日本へ行って日本を見ると同時に、日本人とも話をして、自分たちの主張も聞いてもらう機会をもつ方がいいと説得したらしいのです。そして、数カ月後ようやく内部で話をまとめた、ということを書いて来てくれた。それが私が赴任して一年が過ぎた頃だったかと思いますが、初めて二十数名が日本を訪問しました。これがJESによる第一回目の訪日でした。

その後毎年一回に二〇人から二十数人ぐらいの人たちが日本に来て、日本各地を視察しました。その数は多くはないけれども、その人たちが戦後の日本の新しい面を

和田 そこで大使として、次に、オランダに対するアジア女性基金の事業をどうするかという問題に取り組んだわけですね。

池田 そうです。アジア女性基金の資金を受け取るかどうかは、それぞれの被害者にとってなかなか難しい問題で、ただ金銭だけ受け取るのかという疑問もありましたから、金銭と同時に日本政府の誠意を示す必要がありました。下手をすると、金銭によつて解決できる問題ではないということ、断わられる可能性が十分ありました。ここで、一つ申し上げたいのは、オランダは女性基金の対象となる唯一の非アジア国で、ここにオランダにおける対応の特徴があるということなんです。

いま申し上げたJESの人たちは、当時、毎月一回在ハーグ日本国大使館に対して戦争賠償要求のデモをしていました。大部分が年配の人たちでプラカードを掲げた数十人程度の人たちからなる静かな集まりという形のものでした。日本の立場は、言うまでもなく、それらの問題は法律上はすべて解決しているというものです。また、特記すべきことは、オランダ政府も日本政府と同一の立場をとっていたことです。ただ戦争被害者の中に反動的な雰囲気が残っていることは、これまた否定しようのない事実でした。しかもオランダのような民主的で自由な国ではメディアが時にはインドネシアでの収容所生活を

直接に見て、自分たちが昔戦争時代に思っていた日本と全然違うという印象を持つようになった。そういう意味では、この招待計画は非常に大きな効果をもたらしたのではないかという気がしています。その後、この招待計画は戦争被害者の子女の青年達を夏休みに日本でホームステイさせる、というものに拡大されました。この青年交流に関連して、今でもはっきり覚えていることがあります。ある日、見知らぬ戦争被害者から手紙を受け取りました。そこには、高校生の娘がこの青年交流計画に参加して日本で一夏を過ごしたこと、ホームステイ先の家族から娘が心暖まる世話になったこと、娘からその話を聞いているうちに「自分の心の中の日本との戦いはもうこれで終わった」と思ったこと、等が綴られていました。その手紙を読んだ時の感激を今でも忘れることは出来ません。

その他、この平和交流計画の予算によつて、インドネシアにおいて戦争被害者が残したオランダ語の日記を一部日本語に訳出するということも行われました。訳出された日記や当時の日蘭双方の関係者の証言を基に、第二次大戦中のインドネシアにおける「戦争の記憶」展がアムステルダム博物館で開催されたこともありました。

アジア女性基金事業をはじめまで

誇大に報道する。ひよつとすると主要紙の一面トップの記事になったりするようなこともありました。なんとかそういう雰囲気や少しでも変えていくように、日本側として努力しなければいけないと思っていました。そのような戦争被害者の中でも、日本に対して最も強い反日意識を持ったグループは慰安婦と称せられた人たちでした。

これに関連して具体的な二人の人を挙げる必要があります。一人はハウザーという退役した将軍です。彼はかつてオランダ国軍の参謀総長を経験し、社会的にも尊敬されている人物でした。自分自身が子供の時にインドネシアでの収容所の生活をして、お母さんもそこで亡くなった。奥さんはやはり収容所経験があるという人でした。ですから個人的には彼は日本に対していろんな複雑な思いがあったと思うのですが、心の広い人で、もし日本政府がアジア女性基金を通じて誠意を見せるということであり、かつ戦争被害者（JES）のグループがそれを受け取ってもいいと言ったのなら、自分が窓口になって日本側との連絡をやってもいいとの返事でした。しかしいざれにしても、受け取っていい、という戦争被害者団体の反応が無い限りは、自分としては動けないというのがハウザー將軍の意見でした。

私は当時インドネシアから帰って来た、何人かのオランダ社会の中でも上層部で発言力を有していた人たちと

密接に連絡を取っていましたが、その一人がこのハウザー將軍です。もう一人がヨンクマンという人です。この人は外務省でイギリス大使を勤め、のち宮内庁長官となつた人ですが、この人ともよく連絡を取って、いろんな意見交換をしていました。

和田 ヨンクマンさんはどういう経験をされた方ですか。

池田 この人も子供のときに收容所に入っていました。父親は軍人だったと思いますが、そこははっきりと記憶にありません。ただ、彼が母親と妹と三人でインドネシアのある收容所に抑留されていた当時のことをくわしく話してくれたことを覚えています。

和田 そのヨンクマンさんとお話になって、それからラブレーさんとお話になったわけですね。

池田 ハウザー氏もヨンクマン氏も戦争被害者のグループ（JES）に属していたわけではないのです。実際の戦争被害者との関係で言いますと、JESの長であつたらブレー氏が重要な鍵を握っていました。

ラブレー氏はその頃毎月一回、大使館前でデモがあつたときに必ずそれに出てきたのです。われわれはそのデモが静かに行われた場合には、そのデモが終わつた後、四五人の代表たちに大使館の中に入ってもらつて、大使室でお茶を飲みながらいろんな話をするという慣行をつくりました。万一デモが非常に過激なものであつたりした

場合は、そういうことはしない。しかしながら極めて静かに、ただブラカードだけを持って集まるというようなことであれば、大使室でお茶を飲みながらいろいろ意見交換しよう、ということにしています。

和田 それは大使が赴任されてから始まつたことですか。

池田 私の前任者のときにこのデモが始まつているのです。したがって前任者の時、数回はそのような話し合いをやつたと思います。その後、実際私はオランダに五年間勤務することになりましたから、その間一カ月に最低一回ラブレー会長やその後任のパウマン氏、それからユングスラーヘル氏（法律顧問）、レンダース副会長らと会うことになりました。彼らの家族を入れて、食事をしながら話をしたことも何度かあります。

私がJESの幹部たちと知り合つて、かなり親しくなつた頃、幹部の一人から大使館員とともにゴルフに誘われたことがあります。ドイツ国境に近いその人の家の近くでゴルフを共にしたあとくつろいで歓談していた時のことです。「自分にとつては大使は友人です。しかし自分の仲間の前では、そう呼ぶことが出来ないことは理解してほしい」と、この幹部は私に打ち明けました。たしかに、私とJESの人達との関係は、そのような微妙な関係の上に成り立っていました。オランダは数百年間にわたりインドネシアを植民地としてきただけであつて、社会

の各層の間にインドネシアとの関係を直接、間接にもつ人たちが多く住んでいることもそのうちよく理解できるようにになりました。

ラブレー氏は先ほど申し上げたような経歴なのですが、終戦後、軍の捕虜として、確かシンガポールに連れて行かれて、シンガポールで労働をさせられた。戦争当時、民間人の扱いと軍人の扱いというのは当然違つていました。私の印象に残っているラブレー氏は必ずしも決まり切つた考え方をしない人です。平和交流計画の招待で日本へ行くことが決まつた最初の年のことです。どこに行きたいですかと、彼らの希望も聞いて一案をつくらうとしたときに、彼が靖国神社に行きたいと言ひ出したのです。自分は軍人だから、ぜひ靖国神社に行つてみたいと思つている、と言つたのです。靖国神社に対して肯定的な関心を持つているという印象でした。

それじゃあそういう案をつくりましょうと言つたら、それから二日ぐらいしてから彼から私に電話があつて、持ち帰つて検討した後、靖国神社へ行くなんてなんだ、とみんなから反対されたから、あれだけはキャンセルする、ということをやつてきました。ちよつとそういうおもしろいところがありましたね。

和田 くだらないところがあるのですね。

池田 ラブレー氏自身は日本に対して、JESとして日本

の裁判所に対し訴訟を行っていましたから、日本には行つたことはあつたのですが、それは東京に行つて裁判所へ出向くぐらいだったのでしようね。ところがその後、我々がアレンジした日程で毎年一回二十数人の人たちが日本に行き、地方を視察し、日本側の多くの人たちと話し合う機会をもつようになりました。そういうこともあつて、やはり今日の日本についての認識が格段に進んできました。そういうような状況下でアジア女性基金の活動について話し合うこととなりました。

さて、アジア女性基金のことをハウザー氏と話したら、戦争被害者の団体が受け入れるのだつたらいいというのでしたから、これはラブレー氏と話をするのが一番近道だと思つて、彼と話をして、その話を持ち出したのです。そうしたら、先方はちよつと考えさせて欲しいとのことでした。自分が持ち帰つて仲間と相談してみることとを言つて、返事が返ってくるのに相当な時間がかかりました。だいぶ内部で議論をしたのではないかと思います。

それで結局彼からの返事があつて、自分たちJESとしてはアジア女性基金の活動には無関係である、中にはそういうところから支援を受けるべきでないという人たちもかなりいる、しかし中にはそれを受け取りたいと言う人ももちろんいる、年を取つた一部の女性たちが償い

の資金を受け取りたいと言っているのに、絶対に受け取るなどというのも容易ではない、という説明ぶりでした。結局、両方の意見はあるが、自分個人の意見としては、もし日本側が実施するのであれば黙っていることにする、というものでした。さらにラプラー氏は聞かれれば反対だと言わざるを得ないけれども、聞かないで欲しいとも述べました。そして受け取りたい人が受け取るというのであれば、それについては最終的には異論はないということになったのです。

そういう反応がラプラー氏からあったので、ハウザー氏にその話を伝えたら、同人はそれはよく分かる、それでは結局彼の意見を聞かなかった形で、償いの基金を受け取るための窓口をつくろう、ということになりました。ハウザー氏自身はそれまでにそういう経験があったのです。オランダはナチス・ドイツによって電撃的に占領されたという苦しい経験をもっています。戦後、オランダとドイツの間で、ドイツからの償い金を受け取る窓口になって、それをオランダの被害者に渡すことをやってきた「ペリータ」という機構が出来て、ハウザー將軍はその「ペリータ」の責任者でもあったのです。そのドイツとの経験があるから、日本とのことについても、同人はだいたいどういことをやるかはわかっていて、自分たちには事務的能力があると書いていました。それで彼が

いう方針を採りました。

和田 例えば、中にはすでに条約上は処理が済んでいるので、個人に対する償い金、atonement moneyのようなものは出せないのだというような考え方を聞いたのだという議論があるのですが。

池田 それをあえて強く大使館側から言ったことはないですね。向こう側には、そういう支援を受けるときは現金よりもベッドや車椅子のような具体的なものの方がいいという気持ちも初めのうちにはありました。

和田 後のほうになりますと、ちよっと変わりました。経過を申しますと、最初二国一地域で始めて、その次に今度はインドネシアとの交渉になるわけです。インドネシアをどうするか。インドネシアと交渉した段階で、インドネシア政府が個人に対するような事業はやめてくれと。集団的な高齢者の福祉施設をつくるのにお金を出してもらいたいという話になりました、それをOKしたわけですね。オランダはその次に来るのです。ですから、さながら医療福祉支援の活動、集団的な医療福祉支援の活動をインドネシアにやったので、インドネシアとペアになるはずのオランダでも、そういうふうにするというお考えがあって、その線で交渉を始めたのかなと思っただけです。どうでしょうか。

池田 私はあまり強くそこを意識していませんで

了承してくれたことによって、アジア女性基金の事業は具体的に進み出したということですね。

オランダ事業の特質

和田 実を申しますと、アジア女性基金の事業というのが募金によって国民から償い金を出す、政府資金によって医療福祉支援をする、それから総理大臣の手紙を出す、この三つの柱でやることになっていて、韓国、フィリピン、台湾はそれで進めたのです。ところがオランダは全然違う形になるわけです。このへんについては何かお考えがあったのでしょうか。

池田 どの違いですか。

和田 国民からの募金による償い金はオランダに対してはありませぬね。それから橋本総理大臣のコック首相に対する手紙の写しが渡されました。オランダでは医療福祉支援一本という構想になっていたように見えるのですが、どうしてそういうふうになったとお考えですか。

池田 彼らとしては償い金を受け取るよりも、事実上の支援を受けるという意味では、目に見える形で、例えば車いすだとかベッド、そういうものを受けるほうがお金をもらうよりは償い的な意味がより強いというように見たのではないかと思えます。私はこの点についてあまりこだわらなかつたので、むしろ先方の意向を尊重すると

した。ただ私の下で本件を担当していた書記官が、確かにインドネシアのケースのことも挙げていました。今おっしゃったように、一般の戦争被害者に対し五六年に日本はオランダとの間で見舞金というのを出しています。そういう意味でお金の面ではすべて終わっているということだから、償い金よりも具体的支援物のほうが、よりふさわしいという感じは漠然とは持っていたような気はしますけれども、そんなに強くこだわったわけではありませんでした。むしろ、本人たちの希望に即するような形がより望ましいと思っていました。

和田 ハウザーさんもOKということになった後で、具体的な形を詰めていくのはJESにいたハマーさんとか、そういう方々とお話を進められたわけですね。宮原さんとか、松林さんとか、そういう方がお進めになったわけですね。

池田 丸尾公使、その後任の軽部公使の尽力もありました。

和田 そういうプロセスで、医療福祉支援の事業ではありませんが、個人一人ひとりに対して実施する道が選ばれた。そして最終的には三三〇万円か三〇〇万円か、それぐらいの金額の範囲で医療福祉支援を実施するということになりましたね。

池田 そうです。

和田 その形が選ばれたことについてご感想はいかがですか。

池田 JESは、ラプレー氏が言うように、アジア女性基金から金を受け取ることにについては、自分たちはもし聞かれれば反対だと、そういう立場を取っていました。つまり彼ら自身は依然として一般的な戦争賠償というようなものを要求しており、慰安婦と言われる人のためのアジア女性基金の事業について、特別の関心は持っていませんでした。ですからJESにいたままではアジア女性基金の支援を受けることは出来ないから別の機構をつくるということで、JESから出て行く格好になって、ハマー女史がハウザー氏の下で事業実施委員会（PICN）の仕事をするようになったのだと思います。

和田 そのプロセスで、いわゆる領収書問題というのはどうでしょうか。領収書を出すか出さないかということに對して、ハウザーさんが非常に強く反発されたということで、池田大使とのやり取りがあったとお聞きしました。そのへんはいかがでしょうか。

池田 結局一人当たりいくらぐらいで、それ掛ける八〇人弱（認定された慰安婦の数）ということで、全体はこれぐらいの額になるということを東京のほうで計算して全体の額を割り出したんだと思います。

和田 当時の組織の中ではプロジェクトマネーというふう

に称されていましたし、受け取った人はコンペンセイションと思っていましたね。これは長い間、補償がいかんとか、どうだという議論があったのですが、結局オランダの場合は特別な形ということで基金の中では非常に注目されるケースになったわけですね。

合意が出来て、オランダ事業実施委員会（PICN）が立ち上げられ、そしてそこが申請者を募集されて現実に認定もなされ、それに基づいて支給が進められた。PICNの仕事ぶりについてはどんなふうにお感じですか。

池田 PICNの個々の問題については、もちろんプライバシーの問題があつて、日本側はタツチしないということになっていました。「ペリータ」というドイツとの間で同じような仕事をやっていた機構を訪ね、話し合いをしました。オランダ側関係者は、事務的能力のある人たちがやっているという印象を持ちました。それ以上は彼らに任せる以外に無いと思っていました。

和田 ハマーさんについてはどのようにお考えですか。

池田 ハマーさんという人は、ご自身が幼児の頃、インドネシアでの収容所生活を経験していますが、慰安婦と称せられる人たちの弁護士をやったり、心理学を勉強した人で、人間的にもよく出来た温厚な人ですから、そういう婦人たちが信頼されていたのじゃないかという気がしています。日本側との間では、意思疎通をはかるよう

努力され、調整的な能力のある人だという印象も持っています。

和田 コック首相とはどんな方ですか。

池田 コック首相という人は、当時日本とオランダとのことについて真剣にいろんなことを考えられた首相で、日蘭関係の修復に理解と協力を惜しまない人でした。彼は決して日本側を非難するようなことはなかったですね。むしろ公的な立場としては、戦後処理問題については日本とオランダの間では法的に一〇〇%決着済みであるという立場を堅持していました。だからオランダ政府として日本政府に対して言うべきことはない、しかしながら大使館が自発的に戦争被害者の人たちに對して何らかの積極的な支援をして、その結果としてその人たちの気持ちや和らぎ、それが日蘭関係全体にとつていいということであれば非常にありがたい、だからそのために間接的にオランダ政府が出来ることがあれば、いつでも手伝う用意はありますという態度でした。私は、過去の問題全般について、オランダ政府は首相をはじめ関係者が非常に冷静な対応してくれたことを高く評価しています。

通常、在外公館における外交活動は、大使館と駐在国における外務省や首相府との間で話し合われるのが普通です。しかし、オランダにおける過去の問題の処理については別でした。私は戦争被害者団体と直接会い、彼ら

との話し合いの結果を必要に応じて蘭外務省や首相府に報告するという形をとりました。コック首相がある時私に「自分は戦争被害者の団体からはあまり信頼されていないようだ、池田大使はどうしてそんなに信頼されているのかその秘訣を教えてください」と言われたことがあります。これはコック首相の私たち大使館員への慰労の言葉と解すべきものです。

そしてさらに特筆しなければならないことは、ベアトリクス女王陛下その人が、日蘭関係のために真に努力されたことです。オランダ王室と日本皇室の絆は強く、この絆が両国関係の前進のために重要な役割を果たしました。オランダ国民の女王に對する敬愛の念は強く、女王陛下の希望する日蘭関係の発展のために、オランダ政府としても全面的に協力するとの対応ぶりでした。とくに二〇〇〇年五月の天皇皇后両陛下のご訪蘭の成功は、女王の強い意思があつてはじめて可能となりました。女王陛下を支えていた宮内庁のキスト、フェーネンダールの両長官とはきわめて緊密な協力関係を築くことが出来たのも、いまから振り返ってみて、懐かしい思い出です。

実際オランダに赴任して、非常に残念に思ったことがあります。それは江戸時代に出島を通じて日蘭間で維持された二五〇年以上にわたる交流は、東西文明の交流の点からも極めてユニークで重要な交流です。日本が鎖国

時代にオランダを通じ、ヨーロッパ文明を吸収したことは、後の日本の近代化に貢献しました。また、日本との間の特別の交易に利益を見出しながら、同時に、日本という国を西欧世界にはじめて体系的に紹介したのはオランダです。オランダ東インド会社の医務官であったシーボルト等が日本からもち帰った江戸時代の日本の文物の見事さには目を見張るものがあります。ところがオランダでは日本との「過去の歴史」をめぐる話というところでも第二次世界大戦の際のインドネシアでの収容所の話に止まってしまおう、という傾向がありました。こういう状況はなんとか双方が努力して変えなければならぬと思います。

和田 私の印象では、オランダの方々も非常に強く主張することを主張されて、それをやはり池田大使の大使館がよく聞かれて、それをまた本省のほうと話されて、オランダ側の主張に応えるような努力をなさったところが非常に注目される点だと私は思います。

池田 それはありがとうございます。オランダ人というのはイエスとノーを非常にはっきり言う国民で、だいたい物事の一部が出来ないときに最初はノーから始めることがあるのです。あなたがおっしゃっていることは出来ませんと言ってね。日本人なら逆に、全体としては協力できまうと言ってから、あとでここは無理です、という言

い方をするのですが、オランダ人なら初めノーと言って置いて後のほうでこれは出来まう、と言ってくる。そういうところはオランダ人は非常にはっきりしています。たぶん意思疎通では私はあそここの国はだいたい顔面通り受け取っていいと思っています。そういう意味では虚飾がなく実に正直で、同時に頑固とも言われる国民性を持っていると思います。オランダ人との間では、一度信頼関係が出来上がるとそれはいつまでも続くというのは私の経験の教えるところなんです。オランダ人の質実・剛健という一般の国民性は、プロテスタント（カルビニズム）の伝統から来ているものと思われまう。私自身はオランダとの過去の問題を処理するに当たって、謝るべきところは謝るが、主張すべきところは主張し、決して自虐的にならないように注意してきました。例えば、オランダ人がかつての日本の対応を非難する時、それではオランダ人は数世紀にわたって植民地支配を行ったインドネシア人に対し謝罪したことがあるのか、と質問するにしています。

オランダ人は自分が正直であるだけに、他人の誠実な指摘には耳を貸すところがあります。私の主張が取り入れられたところは幾つかあります。一方的で自虐的な謝罪はその時、一時的に問題を解決したように見えますが、長い目で見て国と国との間の健全な関係を害するものです。

これに関連して、オランダ人戦争被害者の中では異質の存在であったカウスブルック氏の名を挙げる必要があります。同氏は、少年時代、インドネシアのキャンプで生活した経験をもっていますが、後年作家として、当時のことを多くの作品に残しました。同氏は決して日本の植民地政策を美化してはいませんが、逆に、オランダの植民地支配、戦争被害者たちの「偽善ぶり」を鋭い筆致で批判しました。私が同氏と知り合った頃、同氏ははじめ、私に対し大使館が戦争被害者の団体に何を行っても無駄なことである、と言っていました。二〇〇〇年の日蘭四百周年事業が終わったあと、大使館側の努力を評価する、と述べるように変わりました。なお、同氏は長崎から東京まで、かつてのオランダ商人たちの「江戸参府」のあとを忠実にたどり、写真入りの美しい紀行文を著しました。オランダには、このような少数派の人たちも住んでいることを知る必要があります。

アジア女性基金事業の意味

和田 振り返られてアジア女性基金のオランダ事業というものには意味があったでしょうか。

池田 非常に意味がありましたね。日本とオランダの第二次世界大戦から出てきた問題については、法律上は完全に処理済みであるという立場を変えることは出来ないけ

れども、同時に民間人と軍人を合わせて一三万人の人たち、特に民間人九万人ぐらいの人たちの戦争被害者の感情がまだ残っている（オランダの全人口は一六〇〇万人）。この人たちに対して五六年に見舞い金を出したけれども、十分な額とは見られなかったというようなこともありまう。戦争から生み出された負の遺産とも言うべき問題は考えてみると容易ならざる問題で、なかなか終止符を打てるような簡単な問題ではないのですが、しかし個人の恨みのレベルは別にして、社会対社会としては、この問題をあまり大きな日蘭関係の阻害要因にしないように、一つの大きな区切りをつけることは出来ないか、という問題意識は赴任して以来常に持っていました。それも戦争が終了してすでに半世紀以上が経っているという事実を考えてみると、ますますそのような象徴的な区切りが必要になってきます。

その中では平和交流計画により被害者を日本に招待できるようなった。それから「青年交流」という新しいスキームを作り、戦争被害者の子供たち、特に高校生ぐらいの人たちを、夏休みに日本に招待することが出来ました。これも非常に良かったですね。そういうことの一環で、アジア女性基金の事業として慰安婦の問題に一応の終止符が打てたということは、日蘭関係の中でも最もきびしい反日意識をもった人たちに対し一つの解決策を

見出したという意味で、全体の日蘭関係をその後進めていく上で大きなプラスの影響を与えたのではないかと思えます。

ほかの国を見てみると、中国とか韓国でまだ歴史問題がずっと尾を引いている。果たしてアジア女性基金のなさったことが、どのように評価されるべきか、という全体像について、私自身必ずしも充分な判断材料はないのです。しかし、少なくともオランダにおいては、広くは平和交流計画に基くいろいろな事業が順調に行われたこと、また、アジア女性基金の事業が予定通り実施されたことは極めて重要でした。

さらに言いますと、日蘭両政府は二〇〇〇年の年を、日蘭間の交流四百周年を祝う年とすることに合意しました。そして、一年間を掛けて双方が講演会、展示、音楽会、スポーツ交流等々いろんな文化的な行事を行ったのです。その数を数えると、オランダだけで三〇〇ぐらいの日本関係の行事が行われたと言われています。オランダにおいては、まちがいがなく、この年は対日関係において第二次大戦後では最も画期的な年でした。ライデンのシーボルト・ハウスの復旧のために日本政府が資金援助をしたり、グローニンゲン大学の日本研究センター開設に当たり、日本政府と民間が一部協力できたのは、この年のことでした。そして、この年の一番重要な行事は、

ダム市長と一緒にずっと花輪献呈式に参加しました。

そして何よりも両陛下のご訪蘭を成功に導く上で大きな役割を果たされたのは、ベアトリクス女王陛下ご自身です。政府と一体となって、両陛下の受入れに尽力されました。このアムステルダム広場の献花式は最初の難しい公的行事でしたが、それが終わった直後に、女王陛下が私に「この献花式がどれほど長いものに感じられたか。それが無事終了して安堵している」と漏らされた言葉を忘れることは出来ません。献花式がとり行われた広場は周囲を約二〇〇〇の窓をもつ数階建てのビルがぐるっととり囲む形になっていましたから、両陛下の献花式を妨害しようと思えば、容易にできるような場所にありませんでした。そして、この献花式のあった夜の女王主催公式晩餐会において、天皇陛下は、オランダ戦争被害者たちの被った多大の苦難に対し、深い悲しみの気持ちを表明されました。その後の日程全てに、女王は異例な形で両陛下に同行されました。このように、過去の歴史の後遺症を乗り越えるためには、やはり関係国双方の努力が必要とされるものです。

日蘭関係をよくする

池田 過去の問題についての処理について気の付いたことを二、三点追加します。私が九六年にオランダに赴任し

もちろん天皇皇后両陛下のオランダご訪問でした。この二〇〇〇年に至る全体の流れの中でアジア女性基金が行った事業を振り返ってみれば、やはり日本側がこの機微な問題を正面から見据えて、日本としての誠意を見せたということが、オランダ側からも高く評価されたことではなかったかと私自身は思っています。

和田 天皇陛下のご訪問の折のハウザー將軍の役割についても触れていただけますか。

池田 ハウザーさんはオランダ側でのアジア女性基金事業の立ち上げのときには重要な役割を果たしましたが、同時に元軍人として両陛下のご訪問のときの最初の重要な公式行事の際に、余人をもって代えがたい役割を果たしました。すなわち、アムステルダム市の広場にある戦没者の記念碑に対する花輪をささげる儀式のときに、ベアトリクス女王の要請を受けて、ハウザーさんとう一人の軍人が軍服を着て、両陛下を両脇から守るような形でエスコートしました。ハウザー氏自身が戦争被害者でしたから、戦争被害者の人たちの対日意識を変える上でも、これは一つのシンボリックなケースでした。

下手をすると、当然ながらどうしてそこまでやる必要があるのかと、同じ被害者から批判される可能性は十分あったわけです。しかしそういうもの乗り越えて、両陛下、ベアトリクス女王陛下、コック首相、アムステル

てから、五年の間に社会の各層のオランダ人たちと話をする機会を持ちました。オランダの戦争被害者の気持ちも分かるけれども、同時に日本のこともよく理解していて、なんとか日蘭関係をいい方向に持っていくために協力したいという善意のオランダ人たちの交友関係に恵まれました。いちいちそれらの人の名を挙げることは割愛しますが、その中でも一人、私にとって本当の助言者と言いますか、友人と呼ぶには偉すぎる人なのですが、第一人称で呼びあえる人がいました。元首相でEUの駐日大使でもあったアンドレアス・ファン・アフト氏です。

私としてはいろんな機会にファン・アフトさんの意見を聞きながら、戦争被害者の問題を処理出来たことは幸いです。二〇〇〇年の両陛下のご訪蘭が成功裏に終わったことを最も喜んでくれた一人でした。古いライデンという大学町に、かつてシーボルトが住んでいた家のあるラーペンブルグ通りという大きな運河沿いの通りがあります。そこを両陛下が歩いておられたとき、二人の女子学生がごく自然な形で両陛下に挨拶をする場面がありました。その時の写真が翌日、オランダの主要新聞の一面トップを飾りました。それを見たファン・アフトさんが、この写真こそ、日蘭関係がいに過去を乗り越えたことを示す「世紀の写真」だと喜んで電話をして来られたのを思い出します。二〇〇〇年五月のご訪蘭を通じ、

オランダの人たちは両陛下のお人柄と日本の皇室の重みに自然に魅せられたと言えます。

四百周年のオランダ側委員長であったファン・ロイ女史（元通産大臣）は日本側との協力に尽力した人でした。彼女がよく言っていたことは、「四百周年事業は決して第二次大戦時の暗い関係のみに焦点を当てるものではない、オランダ船が十分に漂着して日蘭が交流を始めてから、特別な友好関係にあった江戸時代を含め、四〇〇年の歴史を回顧しつつ、今後を展望するものである、その中で両陛下がご訪蘭されることになれば、それは今後の親善友好を図る上で画期的な意味を持つ」ということでした。また、こうも言っていました。「日本にとって確かに天皇皇后両陛下がオランダをご訪問されることについて若干の心配はあるでしょう。一九七一年の昭和天皇の非公式ご来訪の時の激しいデモを思い起す人たちにとっては、両陛下のご訪問を心配される気持ちがあるのは分かる。しかし、この三〇年間にオランダと日本の関係は相当変わってきた。日本にとって重要なことは、オランダの戦争被害者との基本的和解がない限り、中国や韓国と日本の間でいるんな問題が起ると、必ずそれはオランダにも波及することとなる。そしてオランダにおいて、日本は過去の問題について誠意を持って向き合おうとしていない、という見方が続くだろう。オランダでそういう雰囲気

が対応に苦慮することもありました。しかし、同時に戦争被害者たちのデモに対してもある種の規律を要求しました。両陛下ご訪蘭の際には、自らデモ隊に参加しましたが、結果的にはデモが無規律になることのないよう誘導したという面もありました。

かつて日本との間で戦争が行われた国への両陛下の公式ご訪問は、日本人にとっても当該国の人たちにとっても、極めて重い意味合いをもった公的行事です。仮に、二〇〇〇年の両陛下のご訪蘭の際に、かつて一九七一年の昭和天皇の非公式ご訪問の際のような激しいデモが起こったり、不測の事態が発生したりしていたら、大使としての私の判断力の欠如と誤りが非難されることは必定でした。

日本が第二次大戦に突入した背景は複雑ですが、最後の段階でA B C D (America, Britain, China, Dutch) ラインによって包囲されたから、というのが当時の日本側の一般的な見方だと思えます。戦争は「天皇」の名において行われたため、戦後これらの国々との間の和解には陛下のご訪問が計り知れないほど重要な象徴的な意味をもっていたのです。A のアメリカとの間にはいろんなことがあったけれども、昭和天皇のご訪問があつて、過去の問題はすでに存在せずと言っているでしょう。米国は現在、日本にとって重要な同盟関係にあります。B の

気が続くとも必ずヨーロッパ全体あるいは米国にも影響を与える。日本がこの問題について誠意を持って対処していることを示すためにも、なんとかこの四百周年を成功裏に持っていきたい」そういうことをよく強調していたのです。

その意味はよく分かります。オランダにおいては、成功裏に行われた二〇〇〇年の両陛下のご訪問がなければ、今でもそれ以前の影響を受けて、同じような論調が続いていたのではないかと思います。両陛下のご訪蘭については直前ギリギリまで、日本政府部内ではいろいろな論議がありました。例えば、もし大規模なデモがあつたらどう対応するか、そのようなリスクをとる必要があるのか、という類のものです。しかし、ご訪蘭は結果的にはオランダ政府の全面的協力の下に行われ、反対のデモも小規模なものしかありませんでした。オランダ政府は、両陛下のご来訪時、たとえばアムステルダム市内中心部で二メートルおきに警官を配備し通常では考えられないような警備をしてくれました。そして、すべての行事がとどこおりなく無事に行われました。

なお、前述のJES会長であったラプレー氏が病逝した後、あとを次いだのは、元軍人のパウマン会長でした。この人は軍人らしく規律を重視するタイプの人で、日本側に対して、時にむづかしい要求を出してきて、私たちがイギリスへは一九九八年、両陛下がご訪問されました。あの時イギリスではかなり激しいデモが起りました。例えばバッキンガム宮殿広場に両陛下の乗られた馬車が入って行くと、そこに並んでいた昔の兵隊たちがみんなで一斉にパツと背中を向け反抗の意思表示をしたりしました。イギリスの場合にはオランダのような一般市民を含む戦争被害者の感情問題ではなく、かつて七つの海を支配し、東南アジアに駐留していた英国軍人の名誉が、戦争によって大きく傷ついた、という面が強かったと思われまます。しかし、一九九八年のご訪問により、英国との間では、過去の問題につき一つの分水嶺を越えることが出来たと思われまます。

C の中国については、一九九二年一〇月、天皇皇后両陛下がご訪中されました。日本国内ではあのととき国論を割るような議論がありました。私自身、アジア局長として随行する機会がありました。その時、両陛下は無事つつがなくご訪中の全予定を終わられました。当時、中国側が盛んに言ったのは、天皇のご訪問が行われれば、さきの大戦以来の問題に大きな決着を付けることが出来る、ということでした。

実際には今どうですかね。中国の様子を見てみると、昔の話を蒸し返しているだけではないかと思われまます。その後、九〇年代の中頃から中国自身が体

制や政権の存続のためにナショナリズムを喚起する、あるいは反日教育を行う方向にきている。一九九八年の江沢民主席の訪日時に、日本は過去の歴史を忘れるな、という趣旨の発言を繰り返したことはよく知られています。せっかく天皇陛下がご訪問されたのに、これは何だということ、私は中国のその後の対応に対してははっきり言って、強い疑問と懸念を持っています。日本人にとつての天皇ご訪問の特別の重みを中国が知らないはずはないのです。六〇年前、七〇年前のことについていつまでも謝罪することを要求する国に対しては、その背後に如何なる意図があるか疑ってみる必要があります。なお、最近（二〇〇六年八月）になって、「江沢民文選」が出版され、一九九八年の段階で、江氏が日本に対しては「永遠に歴史問題を話し続けよ」と在外駐在大使たちに指示を出していたことが明らかになりました。さもありません、と言わざるを得ません。

Dのオランダについては、個々の戦争被害者の気持ちは別として、象徴的な意味で二〇〇〇年を境として、社会と社会との関係という意味では様相は大きく変わりました。

このように見てくると二〇〇〇年に至る過程でオランダ側に対し日本側が行った諸事業の中で、アジア女性基金が行った償い事業はその一環として重要な意味合いを持つていたのではないかと思えます。

和田 アジア女性基金がやりましたと言いますが、オランダについてはほとんど大使館でやっていただけで、本当にありがたいことだったと思っております。

池田 とんでもありません。

和田 オランダでは九〇人ぐらいの方のうち七九人まで受け取っていただきました。その方たちみんなに喜んでいただきましたから、それは大きいことですね。怒りや恨みを解くのに大きな役割を果たしていますね。象徴的なことですね。

池田 当時、私たち大使館員が行ったことが、日蘭関係の増進に少しでも役にたつたとしたら、幸いと言わねばなりません。

和田 重要なお働きについて詳しくお話していただいてありがとうございます。

（二〇〇六年二月六日、台北にて）